Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　71　pp. 15 ～ 24　2016

方言音声調査の記述報告
――宮城県白石市――

大　橋　純　一

A Descriptive Report of a Study of the Vocal Sounds of a Dialect: Shiroishi City Miyagi Prefecture

OHASHI, Junichi

Abstract

This article brings up the vocal sounds of the Shiroishi dialect as part of the descriptive research that is being done on the various Tohoku dialects. It is primarily reporting the true condition of this dialect as it differs by generation. Specifically, it brings up the following six vocal sounds: 1) the unification of /i/ with /e/, 2) the unification and voicelessness of /si/ with /su/, 3) the combining of the consecutive vowels /ai/ and /oi/, 4) the voiced consonants /k/ and /t/, 5) the nasalization of the consonants /g/ and /d/, and 6) the palatalization of /ki/. Shiroishi city is located in the southern part of Miyagi prefecture, and in the past, it flourished as the castle town around Shiroishi castle. Moreover, within the division of dialects, it belongs to the Nanou dialect family, and the above-mentioned 1)-6) are all considered to be vocal sound phenomena that are characteristic of this dialect. The aim of this article is to clarify how all of these vocal sounds show the actual state of the dialect as it differs from generation to generation within the progression of the recent striking standardization of the language. This study used 10 men and women from elderly, middle aged, young, and adolescent age groups as its basis, and the vocal sounds that were obtained were objectively grasped through an acoustic analysis. Moreover, this comparison will not only simply determine if these phenomena are present, it will also endeavour to be able to trace the various phases of the gradated process where original dialect sounds gradually decline. This will be done through things like visually understanding the small differences or similar conditions in the parts of words that are articulated using an analysis diagram. The results of this comparison made it clear that within above-mentioned vocal sound phenomena, there are both sounds that are quickly declining or already at a terminal stage (these are especially striking when compared with other Tohoku dialects that have undergone similar large group studies) and sounds that are still leaving deeply rooted vestiges. This article's significance and achievements lie in its objective clarification of the actual condition of the vocal sounds of a specific dialect through a large group study of different generations and an acoustic analysis of the study.

キーワード：白石方言，方言音声，世代比較，多人数調査，音響分析

Key Words : Shiroishi dialect, sounds of dialects, generational comparison, large group study, acoustic analysis

1．はじめに

本稿は，東北諸方言の記述的研究の一環として，宮城県白石方言の音声をとりあげ，主にその世代別の実態について報告するものである。資料は 2003 年，2004 年実施の東北大学国語学研究室調査に基づく。同研究室ではこれまで，年度ごとに重点領域を定め，教員，大学院生，研究室 OB などが中心にテーマを出し合い，多人数調査を実施してきた。筆者も学生来，それらの調査に関わりつつ，その成果をたとえば大橋(1998)(2000)(2003)，また比較的近いところで大橋(2011)(2012)などにより公刊してきた。そうした中にあって，当白石市調査は，諸般の事情により，未だ公刊に至っていない。年月を経ても，調査自体の資料的価値は変わらないはずであるが，調査以来，約 10 年が経過したこの時点でその成果を部分的にでも公にしておくことは重要であり，またそれは当然求められてしかるべきであろうと思われる。いずれ方言全体の体系的な記述はなされることとして，本稿ではそれに先立ち，上記するような音声の実態に対象を絞り，報告を行いたいと思う。

Akita University

２．調査の目的と概要

この報告は，次の二点を目的とする。ひとつは，白石方言に特徴的な音声を音響分析により明らかにすること，ふたつは，各音声の世代別状況を多人数調査により（また一部は他方言との比較により）明らかにすることである。

ここでとりあげる特徴的な音声とは，次のことをいう。

１）/i/ と /e/ の合一化
２）/si/ と /su/ の合一化および無声化
３）/ai/ /oi/ 連母音の融合化
４）/k/ /t/ 子音の有声化
５）/g/ /d/ 子音の鼻音化
６）/ki/ の口蓋化

このように，扱う項目は必ずしも体系的に関連を持つものばかりではないが，世代比較を念頭に置く本調査では，下位の世代にかけてもある程度その実態を見通せることに主眼を置いた。また既報告（大橋 1998・2000・2003 など）との比較の便を考え，それらとの対応も考慮した。

分析は，高・中・若・少年層男女計 77 名の調査資料に基づいて行う。[注1]ただし，その中には録音状況や調査不備，母音の無声化などにより音響分析[注2]が不可であったものも含まれる。項目によって対象話者の母数に差があるのはそのためである。

以下，主にはパーセンテージによる総体的な比較を行うが，特定の世代，性，個人を表示する場合には，世代をＨ（高年層）･Ｍ（中年層）･Ｙ（若年層）･Ｊ（少年層），性をｍ（男性）・ｆ（女性），個人を数字で表示し分け，例えば［Hm05］などのように示す。

３．/i/ と /e/

「胃」/i/ と「絵」/e/ のミニマルペアについて，まずは高年層男性 10 名の実相を例に，フォルマント分析した結果をＦ１-Ｆ２図上にプロットして示す（図１）。[注3]図は，Ｆ１（第１フォルマント・縦軸：舌の高低に相当）とＦ２（第２フォルマント・横軸：舌の前後に相当）の交点からなり，各母音の特徴が視覚的に特定できる仕組みになっている。つまり人の顔を左側面から捉えた断面図に見立て，各調音が日本語の基本５母音（男性アナウンサー平均値[注4]）に対し，それぞれどのような位置を占めるかを相対的に見ようとするものである。よって，特に /i/ と /e/ の混同を問題にする当項の場合，Ｆ１（縦軸）の近似関係がその有無や度合を見きわめる重要な視点となる。

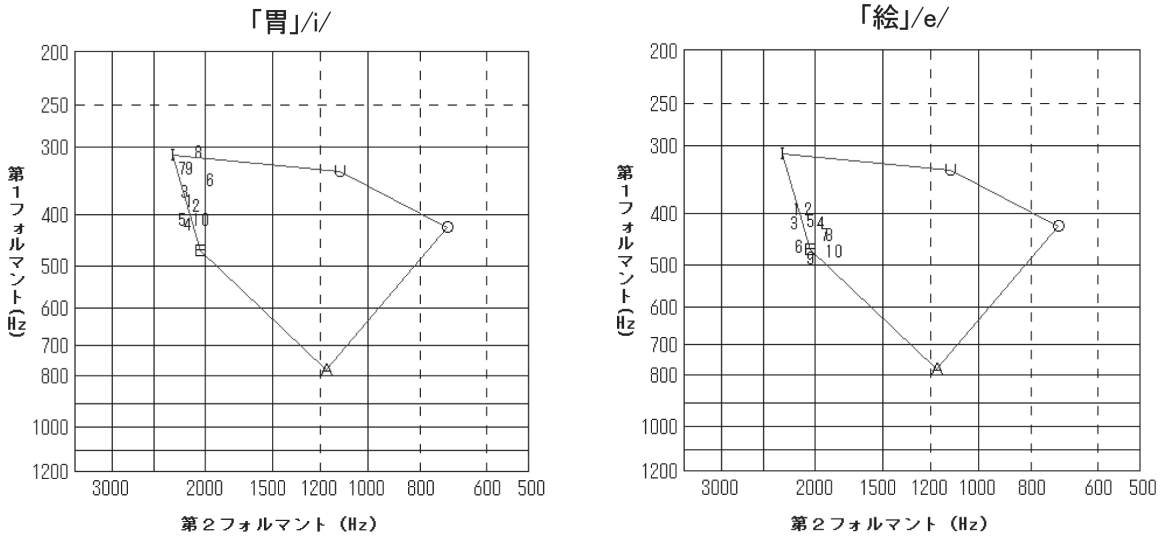
それによれば，当方言の /i/ と /e/ の関係は次のように整理される。

ａ．/i/ と /e/ の区別あり
ｂ．ａ・ｃの中間（/i/ /e/ が接近）
ｃ．/i/ と /e/ の区別なし

その内訳を見ると，ａとｃに各４名が相当し（［Hm06］，［Hm07］，［Hm08］，［Hm09］／［Hm01］，［Hm02］，［Hm04］，［Hm05］），まずはこのふたつで勢力を二分していることがわかる。しかも，ｃの４名がいずれも 400Hz 近辺の中間相（［e⊥］）で重なり合うのに対し，ａの４名はいずれもほぼ基本母音（［i］［e］）と見うる位置で区別を有している。つまり混同の有無と実

図１　高年層男性（Hm）「胃」/i/「絵」/e/ の実相

Ｆ１-Ｆ２図 凡例
・Ｉ・Ｅ・Ａ・Ｏ・Ｕ：NHK 男性アナウンサー 10 名の５母音フォルマント各平均値
・１～10：［Hm01］～［Hm10］各個人の「胃」/i/,「絵」/e/ フォルマント値



Akita University

相の両面から見て，双方はきわめて対照的である。

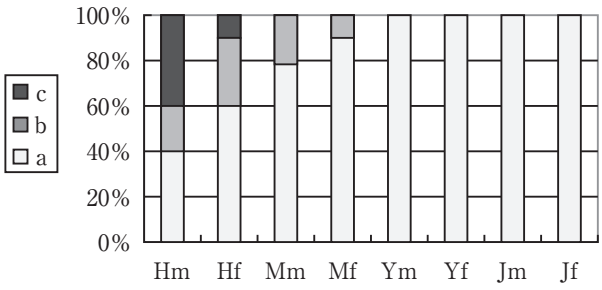
一方，ｂには［Hm03］，［Hm10］が相当する。共に /i/ と /e/ にはＦ１値で 50 ～ 70Hz 程度の開きがあり，数値的にはいかにも区別を有するかに見えるが，図上の接近具合からすれば，やはり本来の［i］や［e］とも性格が異なる。また各実相は，聴覚的な違いが判然としないことに加え，印象としてはむしろ［e⊥］（［e］）の方に近く，[注5]その点ではあくまでｃ的な性質に属するものと分別される。

すると高年層男性に関しては，/i/ と /e/ を区別しないか，あるいはその区別が曖昧であるものを主体としつつ，それらと同程度に /i/ と /e/ を区別するものが併存する段階にあることがわかる。つまり同一方言の最上位世代にあって，こうした対極のものがほぼ対等の割合で同居する現状にこそ，当方言の第一の特徴があるといえる。

では以上の状況は，同世代の女性からさらにそれ以下の世代にかけてはどのようになっているのか。上記の三分類に従い，各世代男女の内訳をパーセンテージに基づいてグラフ化すれば次のようになる（図２）。[注6]

それによれば，高年層男性においてこそｃとｂの割合がａのそれを凌ぐ状況にあるが，高年層女性になると早くもその割合が逆転している。またそのｃとｂの比を狭めつつ，中年層ではさらにｃが消え，若・少年層では残るｂが消えている。つまり /i/ と /e/ の合一化に関していえば，高年層男性はともかくとして，同女性以下ではその痕跡を捉えること自体が難しい状況にあり，全般には区別を有するものの押し上げが急速である。高年層男性の上記のような実態を最後に，方言の大勢としては /i/ と /e/ を区別する段階にあるといえる。

図２　/i/ /e/ の世代別・男女別実態



４．/si/ と /su/

４．１　合一化の実態

「梨」/nasi/ と「茄子」/nasu/ のミニマルペアについて，上記と同様，まずはＦ１-Ｆ２図により，高年層男性 10 名の実相から見ていくことにする（図３）。前項の /i/ と /e/ の場合とは対照的に，/si/ と /su/ の混同を問題にする当項では，逆にＦ２（横軸）の近似関係がその有無や度合を見きわめる重要な視点となる。なお次に記す５語は，無声化等によりフォルマントが抽出できなかったものであるが（［Hm06］［Hm09］<「梨」「茄子」>，［Hm08］<「梨」>），図３ではそれらを除いてプロットしてある。

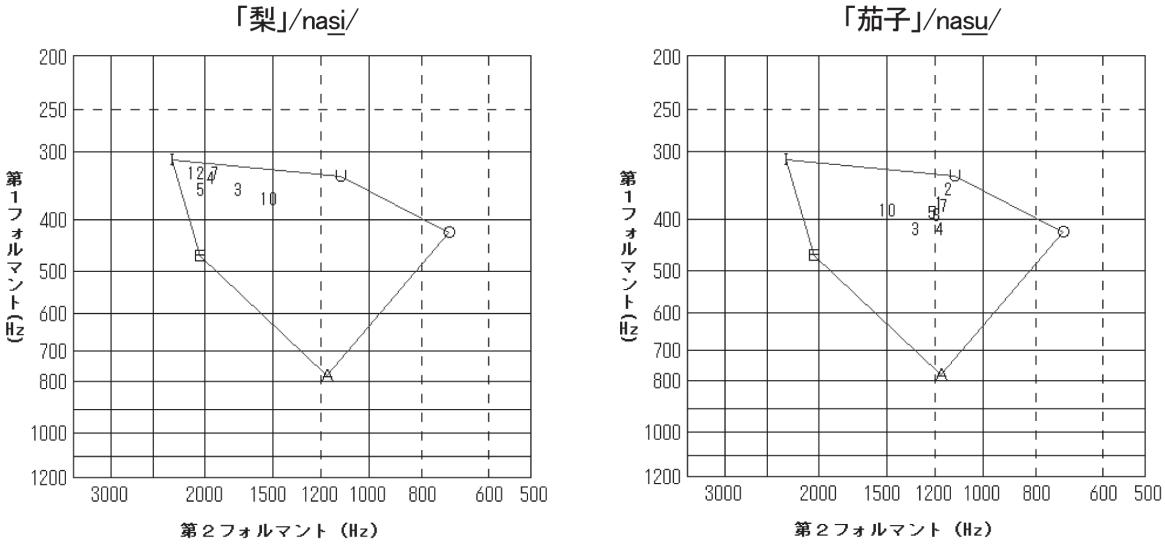
それによれば，当方言の /si/ と /su/ の関係は次のように整理される。

図３　高年層男性（Ｈｍ）「梨」/nasi/「茄子」/nasu/ の実相

Ｆ１-Ｆ２図 凡例

・Ｉ・Ｅ・Ａ・Ｏ・Ｕ：ＮＨＫ男性アナウンサー 10 名の５母音フォルマント各平均値

・１～ 10：［Hm01］～［Hm10］各個人の「梨」/nasi/，「茄子」/nasu/ フォルマント値



Akita University

a．/si/ と /su/ の区別あり

b． a・c の中間（/si/ /su/ が接近）

c．/si/ と /su/ の区別なし

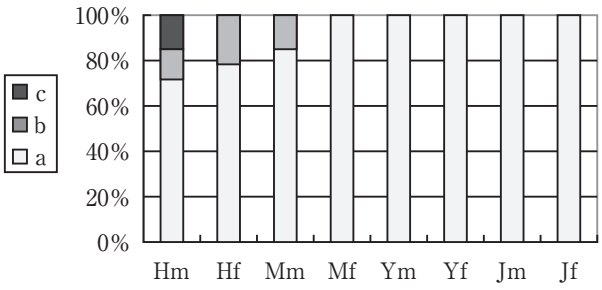
しかしその内訳を見ると，三者間の優劣にはかなりはっきりとした傾向差がある。すなわち，cとbに各1名（[Hm10]／[Hm03]）が相当すると見られる以外は，おしなべてaと見うるものである。しかも，ここでb相当と考える［Hm03］にしても，/si/ と /su/ にはF２値にして500Hz程度の差があり，当人の内省（「梨と茄子は違う」，「梨と茄子は区別して発音する」）も加味するならば，むしろa的な性質のものと見るべきである。

ところで，/si/ と /su/ の発音が似たように現れがちなことについて，上記の話者たちは，あくまで自方言のこととしては自覚的である。しかしその同話者も，発音の在りようがこと自分自身の問題に向けられると，上述のように，「自分は区別する」，「シとスが紛れるようなことはない」といった内省に終始することが多い。その実際音も，図３の諸相に見たとおりである。つまり当方言において純粋に /si/ と /su/ の合一化と認識しうるものは，最上位世代にあっても，きわめて稀な状況になりつつあることがわかる。

その動きは，これよりも下位の世代ではさらに明瞭である。上記の三分類に従い，各世代男女の内訳をパーセンテージに基づいてグラフ化すれば次のようになる（図４）。[注7]

つまりcを示すのは高年層男性の十数パーセント（実質１名）に過ぎず，それに準じるbも中年層男性を最後に完全消失することとなっている。この状況は，より中立的に評価するならば，/si/ と /su/ を区別しない当方言本来の姿が高年層男性に化石的にみとめられるほかは，単に地点全体が共通語的であるに過ぎないということである。当方言において，/si/ と /su/ の合一化は，内省にあるような“かつての古い現象”としての認識が今後さらに定着化し，徐々に理解や意識の上に残るのみとなっていくことが予測される。

図４　/si/ /su/ の世代別・男女別実態



４．２　無声化の実態

/si/ と /su/ は，東北方言一般に，その区別が曖昧となる点で特徴的なのと同時に，語末という音環境において無声化する現象も同様に盛んである（大橋 2002）。それが当方言でも同様の傾向にあることは，先にフォルマント抽出が不可であるものが各世代に散見されたことからも明らかである。「注７」を参照する限りでは，それは特に少年層男性において，また僅かではあるが，全般には /su/ の方にそれがより優勢であることがうかがえる。

しかしここで注目したいことは，当方言にはむしろ無声化のみとめられないもの，しかも単に無声化しないのみならず，逆に末尾母音を明確に（長母音的に）発音する現象が中～少年層の女性を中心に多見されるという点である。[注8]以下に例として，無声化した「茄子」と，それのみとめられない「茄子」のスペクトログラムを対比

図５　「茄子」（無声化）のスペクトログラム
[Yf07]

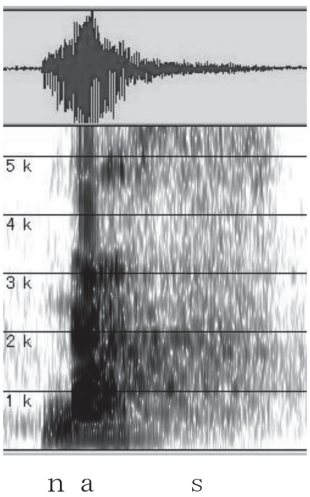
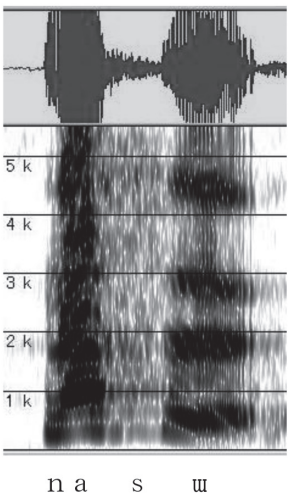


図６　「茄子」（非無声化）のスペクトログラム
[Jf04]



Akita University

的に示す（図５・６）。

このように，両発音に差のあることは，その各特質を細見するまでもなく明らかである。すなわち，左図が /na/ の末尾母音に /s/ の摩擦が連続するのみであるのに対し，右図ではその摩擦に連接して /u/ の母音調音が色濃く現れていることがわかる。しかもその /u/ は時間長にして 0.185sec が計測され，/a/（前音節末）の 0.110sec を基準に考えれば，約 1.7 倍の比で調音が確保されているということになる。このような，本来の無声化とは一見対極をなすようなものが，当方言では中～少年層の女性を中心に多見されるのである。

このことは，質問調査という調査法上の問題を考慮すれば，改まった丁寧な発音がある特定話者に誇張された結果としてとりあえずは理解することもできる。しかしそのような傾向が，上記のように，ある限られた世代や性に偏ってみとめられることには注意を要する。ここでは語末の /si/ と /su/ の実態を見るにとどめるが，この現象に関しては，上記するような世代・性別による比較の徹底はもとより，他音節の傾向や語中か語末かの音環境の違い，さらにはアクセントとの相関[注9]といった点に分析の余地があることを指摘しておきたい。

５．連母音

ここでは，/ai/ /oi/ 連母音が共に融合化して［ε:］～［e:］になる現象の有無を，世代別・男女別に比較する。さらに融合のみとめられたものについて，その実相が母音広狭のどの位置に当たるかをフォルマント分析により客観的に検証する。

以下,「高い」/takai/,「細い」/hosoi/ の２語を対象に，まずは融合の有無の観点から各々のパーセンテージをグラフ化して示す（図７・８）。

５．１　世代別・男女別状況

それによれば,「高い」,「細い」共に，おおむね女性よりも男性の方の融合率が高い。その差は若年層において最も著しく，逆に少年層および高年層においては接近するか，もしくはその比率がわずかながらも逆転している。ただしそれらの差は，必ずしも世代や性別における不規則的な増減の動きを象徴するものとは見なされない。むしろ若年層男性が際立って高い比率（いずれも100％）を示すことによる傾向差と見られ，トータルで巨視すれば,「高い」,「細い」の融合率は，いずれも高～少年層にかけての右肩上がりで一致する動きとみとめられる。

さて，ここではその右肩上がりという事態が問題になる。それはすなわち，融合化という上位世代に連なる現象を，それよりも下位の世代が志向し，さらに活発化しつつあることを意味する。前項までの現象が一様に衰退の傾向を示してきた当方言にあって，この事態は明らかに趣の異なる動きと見なければならない。

一方，その右肩上がりの様相が「高い」と「細い」との間で緩急の差を呈していることには，さらに注意を要する。その差は，主として「細い」の側の事情によって生じている。両グラフの高年層段階に即するならば，当方言において,「高い」（/ai/ 連母音）は本来的に融合化し,「細い」（/oi/ 連母音）は融合化しなかったことがうかがわれる。とすると, 前者が素直にかつての方言音（融合化）が保持された姿と受けとれるのに対し，後者は世代が降り，従前のものとはまた異なった理屈で融合音が派生した姿と受けとれることになる。つまり当方言においては，世代的な推移に伴い，単に現象が保持されるのみならず，それがさらに原理や形を変え，拡充さえしつつあることがうかがえるのである。

このような事態は，県内北東部の石巻市のほか，巨視

グラフ凡例

・グラフは，横軸に世代（Ｈ・Ｍ・Ｙ・Ｊ），縦軸に融合する人数の割合（％）をとる。
・折れ線のｍは男性，ｆは女性，ｔはその双方をトータルして算出したパーセンテージを表す。

図７　高い /takai/

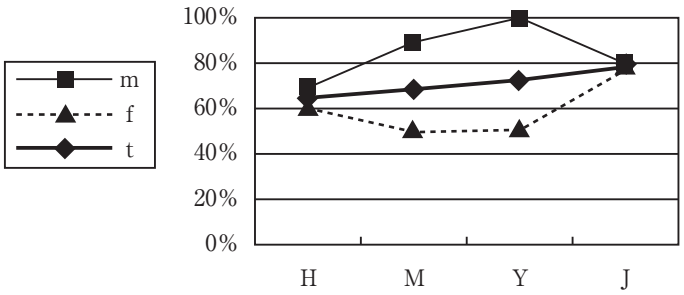
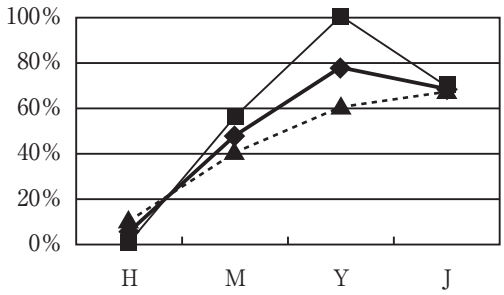


図８　細い /hosoi/



Akita University

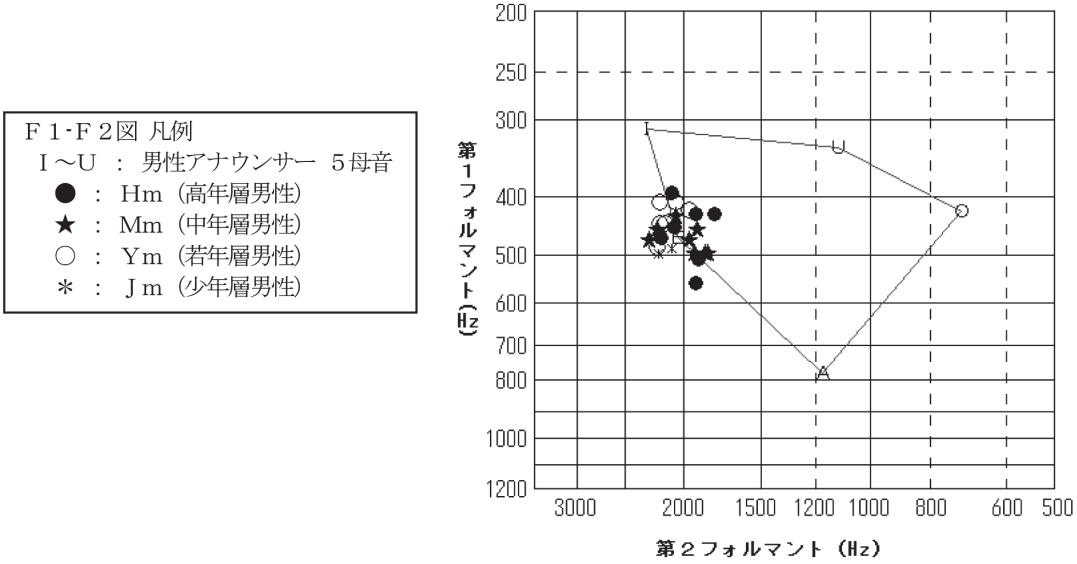
的には東北方言全般にも広く確認されている（大橋2002・2003）。とりわけ石巻市では，ここに問題とする/ai/ /oi/に加え，/ui/（「寒い」）や/au/（「違う」）にも若・少年層を中心に融合化した/eR/が多見された。この一律長母音化ともいうべき事態には，もはや相互同化とか順行・逆行同化とかといった融合原理では説明しがたいものがある。当方言の，一見特異にも見える世代的な右肩上がりの現象も，基本的にはこうした動きに通じるものであると考えられる。

５．２　音響的実相

以上には，連母音の融合化が各世代を通じてなお盛んであること，のみならず，下位世代ではかつて融合音にならなかった連母音構造をもそのように発音する現状にあることを確認した。それらを踏まえ，ここでは，その実相が各世代・各個人においてどのような実態にあるのか，またそれと既見の世代別による動きとがどう関係するのかを検討する。

対象は世代比較が可能な「高い」に限定し，その中の特に男性の場合について，Ｆ１-Ｆ２図（図９）に即して見ていく（図では，男性で融合音になるもの全てを対象にしているが，個人によっては内省が得られるのみで発音のないものがある。図７のパーセンテージと当図のプロット数が一致しないのはそのためである）。

図９　高・中・若・少年層男性（Hm ～ Jm）「高い」/takeR/ の実相



それによれば，実相上に目立った世代差はなく，高年層にやや広口の［ε］が散見される以外は，各世代・個人とも，ほぼ基本母音に重なる［e］か，むしろそれよりも狭い［e⊥］を示していることがわかる。［e］近辺に実相が集中することは，図上で記号が重なり合い，各々原型がみとめにくい状況となっていることからも明らかである。

一方，この状況は，既見の石巻市などと比べるとかなり性格が異なる。以下，大橋（2003）より，同様のプロット図を引用し，当方言のそれ（図９）と当該部分に絞って比較すれば次のようである（図10）。

右図石巻市が左図白石市に対して異なるのは，図上で記号の分散がみとめられること，そしてその分散に一定の秩序だった住み分けの傾向がみとめられることである。またその住み分けは，主には図の縦軸上に沿いつつ，より下方に位置する高年層（すなわち［ε］）が，中～少年層にかけて徐々に上方（すなわち［e］）へと推移していくことによって生じている。つまりそこからは，上位世代に現象してきた相互同化による［ε］（前後のａとｉが相互に干渉し合った結果の［ε］）が，下位世代にかけて徐々に形骸化した［e］（連母音部にもともと当人が体系として有していた音をあてただけの［e］）へと推移していく変化の道筋がうかがえるのである。

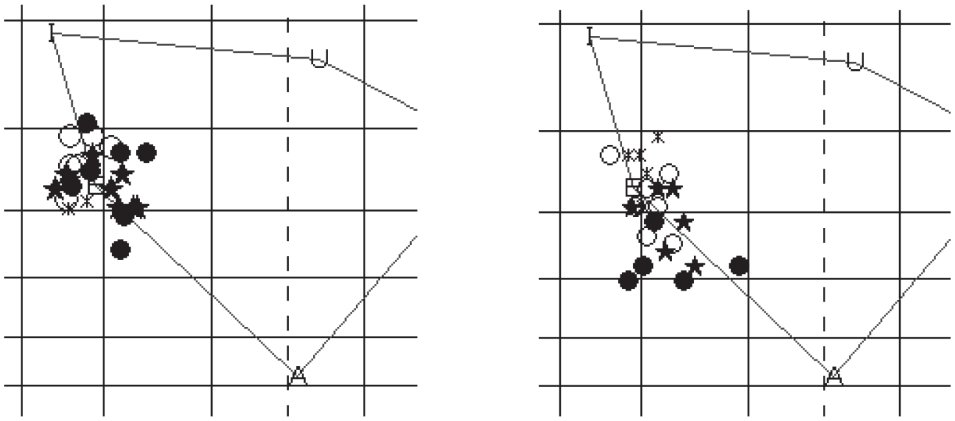
一方，当白石市には，その住み分けや序列の関係が明確にはみとめられない。高・中年層の数名にわずかながら［ε］と見うるものもなくはないが，大勢としては先述したように，互いが基本母音［e］の周辺で重なり合う関係にあり，実相をほぼ一にする姿と捉えられる。

すると当方言では，相互同化（母音の干渉結果）による［ε］の生成が上位世代において既に弱体化し，方言全体が下位世代的な［e］へと形骸化してきているということになる。先の/i/ /e/や/si/ /su/の合一化にみとめられたのと同様，ここにも当方言における方言音衰退の迅速さがうかがえるのである。

Akita University

図 10　白石市・石巻市の実相比較

白石市「高い」/takeR/　　石巻市「甘い」/ameR/



6．有声化と鼻音化

以下には，/k/ /t/（「開ける」，「旗」）の有声化と /g/ /d/（「上げる」，「肌」）の鼻音化について，その世代別の実態を見ると共に，各々の音韻論的な弁別の在り方について，同様の視点から比較・検討を行う。

6．1　/k/ /t/ の有声化

いわゆる語中無声子音の有声化は，東北方言に特徴的とされる音声事象の中でも，とりわけ現象が盛んである（大橋 2002）。またその盛んさは，一方で，語中有声子音が鼻音化すること（それが許容されること）の素地ともなってきた。では，それの当方言における実態はどのようであるのか。/k/ /t/ に即してその世代別・男女別の状況をグラフ化して示せば次のとおりである（図 11・12。なおグラフの凡例は，「5．連母音」のそれに準じる）。

図 11　開ける /akeru/

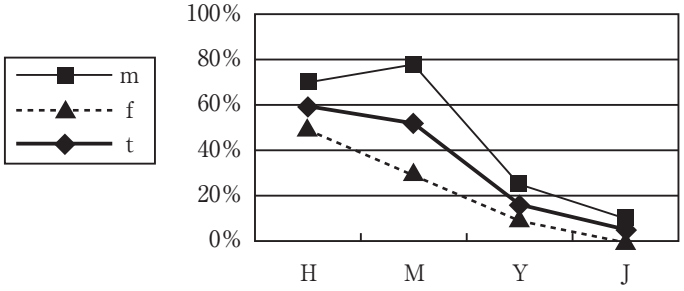
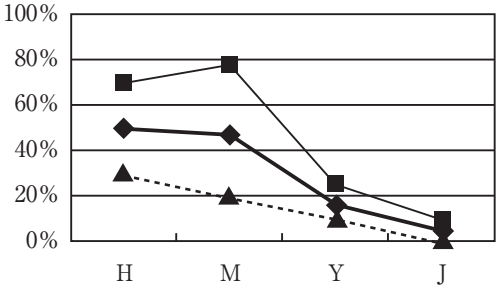


図 12　旗 /hata/



両図の対照からもうかがえるように，「開ける」と「旗」の実態には大差がない。大局的に見れば，いずれもトータルで 50 ～ 60％程度の有声化率を上限とする高・中年層が，若・少年層にかけてその比率を後退させていく姿と捉えることができる。さらに，中・若年層の間に折れ線の強い下降がみとめられる点，それに伴い高・中年層で著しかった男女差が若・少年層にかけて急激にその幅を狭めていく点などにおいても，両発音はほぼ軌を一にする状況にあるといえる。

いずれにせよ，当方言の有声化は，総体的にはそれほど芳しい状況にあるとはいいがたい。むしろ衰退の傾向が強く，それも性別には特に女性の方に，世代的には若・少年層段階に著しいと総括することができる。

6．2　/g/ /d/ の鼻音化

東北方言では，語中の /g/ /d/ /z/ /b/ が，その順で鼻音化する比率が高い（大橋 2002）。中でも /g/ は，鼻濁音［ŋ］としてほぼ全域的な分布を呈し，その比率は若い世代にかけてもそれほど大きな落ち込みはみとめられない（大橋 2000・2003）。[注10] そればかりか，［ŋ］の融合以前と推測される入り渡り鼻音［ᵑg］の痕跡が，福島県沿岸や近隣の新潟県北部にみとめられることも明らかになっている（大橋 2004ab・2005）。

ここでは，これまでに行ってきた以上のような実態把握を踏まえ，当方言の鼻音化が，世代別・男女別に見てどのような実態にあるかを，/g/ /d/（鼻音化率の上位 1・2 位）に即して見ていく（図 13・14。なお前項と同様，

図 13　上げる /ageru/

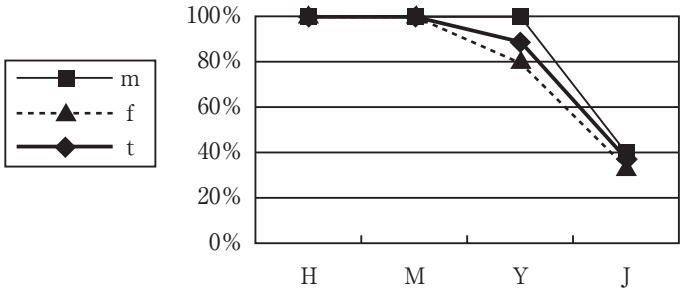
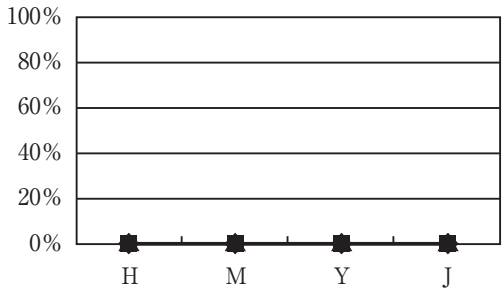


図 14　肌 /hada/



凡例は「５．連母音」のそれに準じる)。

それによれば，/g/ は，高～若年層にかけてはほぼ例外なく［ŋ］に発音される。[注11] 若年層女性がやや比率を下げる観もあるが，それでも同年層をトータルで見た場合には 90％を堅持している。この状況は，たとえば既調査の石巻市に近く，逆に仙台市などと比べればかなり高い保持率といえるものである。しかしその分，少年層での衰退が際立たしい。トータルで 38％。この値は，逆に既調査のどの地点よりも低い保持率といえるものである。結局，当方言の /g/ は，若年層と少年層との間に深い溝があり，一律に保持されてきた［ŋ］が突然に［g］への志向を強め，それへと代替されていく姿として把握することができる。

一方，/d/ は，各世代･男女を通じ，一人として［˜d］に発音するものがない。それに対する内省も，「古い言い方」，「余所のことば」，「言わない」等，否定的なものが目立つ。かねてからの衰退の動きが徹底し，それが定着した段階の姿とみとめられる。

６．３　/k/ /g/，/t/ /d/ の弁別

以上を整理すれば，/k/ /g/，/t/ /d/ の弁別発音は，それぞれ次のように分類される。

・/k/ /g/：①［k］／［g］　②［k］／［ŋ］　③［g］／［ŋ］

・/t/ /d/：①［t］／［d］　②［d］／［d］

その各パターンの世代別･男女別の内訳（パーセンテージ）は次のとおりである（図 15・16)。

図 15　/k/ /g/ の弁別

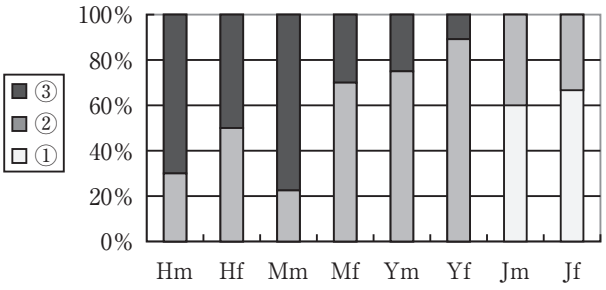
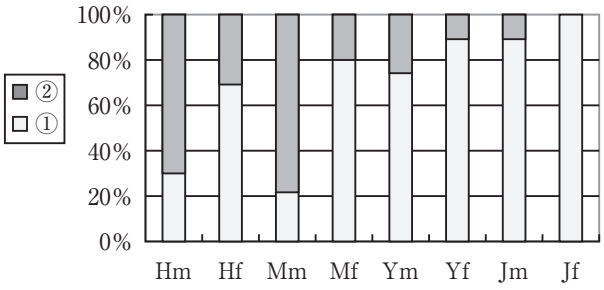


図 16　/t/ /d/ の弁別



（1）/k/ /g/

③［g］／［ŋ］が高・中年層男性においていて共に 70％強の保持率を呈する。すなわち，これが当方言本来の現象であり，現在もなお盛んであると見うる。

一般に男性の保持率が高く，女性のそれが低い。それでも，高年層女性では 50％の保持率がある。ところが，中年層女性となると 30％前後，さらに若年層男性から同女性にかけては 15％と漸減し，少年層ではついに姿を消してしまう。当方言本来の③という現象は，すなわち若年層に最後の痕跡をとどめ，早々に消失したと見ることができる。

その本来の現象を圧倒し，次に勢力を強めているのが②［k］／［ŋ］である。それは，中年層女性から若年層男･女性にかけてがピークとなる。しかし，③と②とは，/g/ が［ŋ］であるという点で，質的には一部通じ合うものを有していた。ところが若年層女性において，①［k］／［g］という質的にも全く異なる現象が忽然として出来する。そしてそれは，少年層に至るや，他を強力に圧倒して主勢力を占めることとなっている。その①の勢いは，パーセンテージにして 60％強を示し，さらに強まっていく今後を予見させる。少年層で②が③を駆逐したのと同様，いずれ近い将来において，①が②を駆逐していくことは必至である。

以上のようであり，当方言の /k/ /g/ に関しては，世代と男女とが交錯する変化の道筋において，③から②を経て①に至るという，三段階の弁別パターンの推移が明

Akita University

確にたどられることになる。

（2）/t/ /d/

②［d］／［d］が高・中年層男性においていて80％前後の保持率を呈する。つまり，本来的な［d］／［˜d］の存在こそ皆無ではあるが，その次段階としての②が，当方言ではなお盛んであると見うる。しかし，女性の場合はそれが振るわず，高年層でさえわずか30％程度の保持率にとどまる。また中年層に至ると，それは20％余りとなる。一方，若・少年層ともなると，もはや男女の差に関わらず，ほぼそれ（中年層女性）に準じるような程度に比率は落ち込んでいく。

それにとって代わって勢力を強めているのが，①［t］／［d］という共通語相当の弁別発音である。それは，高・中年層，男女の間で凹凸を示した後は，ほぼ一律に勢力を伸長し，ついには少年層女性で刷新されるに至っている。

以上のようであり，当方言の /t/ /d/ に関しては，/k/ /g/ の場合よりも単純に，②から①へという二段階の，つまりは /t/ の有声化が抜け落ち，単に共通語的な弁別発音が確立されていくのみの推移がたどられることになる。

7．/ki/ の口蓋化

東北南奥方言（主に宮城県）には，/ki/ が口蓋化して［tᶜi］に近く発音される現象が盛んである（大橋 2002）。以下には，「着る」/kiru/ と「散る」/ciru/ のミニマルペアを対象に各スペクトログラムを比較し，それの当方言における接近の有無を検討する（図 17・18。対象はいずれも［Hm02］）。

それによれば，左図「着る」のスペクトログラムと右図「散る」のそれはかなり模様が酷似している。つまり前音節部において，まずは破裂を示す針状の音響模様（spike）が起音となり，幅広い摩擦の帯域を介して母音調音（/i/）が連続している。これらは，いずれも当該音が破擦的な性質のものであること，しかもその各実相が音響的な面で大差のないことを雄弁に物語っている。当方言の /ki/ が口蓋化した［tᶜi］に近似する発音であることは，以上からも明らかである。

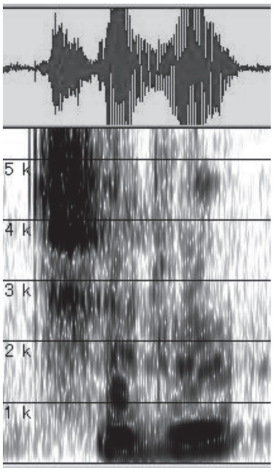
しかし一方，以上の状況は方言全般にはあまり栄えず，実際には高年層男性３名（［Hm02］，［Hm03］，［Hm05］）にみとめられるにとどまる。しかも，うち１名は，発音ごとに［tᶜi］と［ki］が入り交じる不安定な状況にあり，口蓋化がその性質を落としていく過渡的な一段階と解されるものである。また世代・男女を問わず，他の大部分は共通語相当の［ki］に現れるに過ぎず，時にごく少数の話者において，多少口蓋化した無声化音［k̟i̥］が聞かれる程度である。つまり /ki/ の口蓋化（［tᶜi］に発音される現象）に関しては，当方言にあっては，今や高年層男性の一部に稀に聞かれる程度の末期的状況にあるといえる。

8．おわりに

以上，本稿では，東北方言に特徴的とされる音声諸現象について，宮城県白石方言の多人数調査を基礎資料としつつ，主にその世代別の実態を音響学的に，また一部は他方言との比較を通して見てきた。

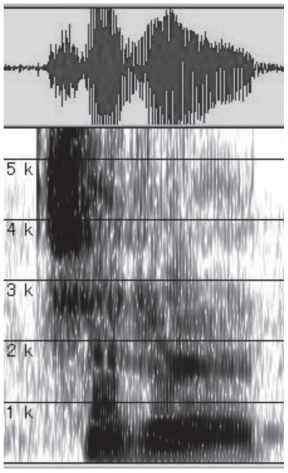
大きく捉えて，それらの現象は，高年層男性を中心に，おおよそ中年層あたりまでは残存の跡がうかがえる。しかし高・中年層女性および若年層以下では衰退の傾向が著しく，そのほとんどが少年層に至って消滅（共通語化）する動きを示している。特に /si/ と /su/ の合一化など，

図 17　「着る」/kiru/ のスペクトログラム



t ɕ i r ɯ

図 18　「散る」/ciru/ のスペクトログラム



t ɕ i r ɯ

その動きの迅速さは，既調査の他地点の場合と比べても目を見張るものがあった。またその点では，/ki/ の口蓋化に関しても同様のことが指摘できる。

しかしその一方で，連母音の融合化など，世代が降るにつれて同化形［eː］になる傾向を右肩上がりに強めていく側面も併せ持っている。しかもそれは当方言においてのみならず，広く東北諸方言に通じる現象とみとめられる点で特筆される。これらは単なる音声現象にとどまるものなのか，それとも音韻現象への転換を意味するものなのか，今後が大いに注目される。

また，［ŋ］鼻濁音の［g］破裂音化の動きも，諸方言に広くみとめられるものと相通じる。これについても，今後を注意深く追跡していく必要がある。

【注】

注１．調査は質問調査法によった。項目は次のとおり。
鯉，声(/i/ と /e/ の合一化)，梨，茄子(/si/ と /su/ の合一化)，高い，細い(/ai/ /oi/ 連母音の融合化)，開ける，旗(/k/ /t/ 子音の有声化)，上げる，肌(/g// /d/ 子音の鼻音化)，着る，散る(/ki/ の口蓋化)

注２．フォルマント分析には『SUGI Speech Analyzer』(アニモ)を，スペクトログラムの抽出には『音声録聞見 for Windows』(DATEL)を用いた。

注３．Ｆ１-Ｆ２図の作図には『F1F2 Projecter』（河内秀樹氏作成）を用いた。

注４．当平均値は，今石元久ほか (1984) のデータに基づく。

注５．ただし，聴覚的に /i/ と /e/ が微妙な実相差を有することは確実に認識しうる。

注６．三分類の判定基準は次のとおり。すなわち，/i/ と /e/ のＦ１の差が 50 ～ 100 以内のものをｂとし，それ以上をａ，それ以下をｂとした。

注７．三分類の判定基準は次のとおり。すなわち /si/ と /su/ のＦ２の差が 200 ～ 600 以内のものをｂとし，それ以上をａ，それ以下をｂとした。なお，当項の場合，フォルマント抽出が不可であったものはパーセンテージに反映させていない。それを差し引いた世代ごとの母数は，それぞれ次のとおりである。→ Hm : 8，Hf : 9，Mm : 7，Mf : 8，Ym: 5，Yf : 9，Jm : 4，Jf : 6

注８．中・若年層女性に各５名，少年層女性に４名，それがみとめられる。

注９．当方言の場合，「梨」，「茄子」は，各世代を通して頭高に発音される傾向が強い。したがってこの場合，/si/ と /su/ が無声化せずに発音される現象は，アクセントの高まりに伴う副次的な性質のものとは言いがたい。

注10．金田一（1967），加藤（1983），永田（1987），馬瀬ほか（1999），大橋（2007）等によれば，［ŋ］は，全国的には衰退や消失の傾向が著しい。それらに対し，東北方言では，既調査の仙台市（少年層）で50％弱，石巻市（同）で60％強の保持率である。

注11．当方言の場合，鼻音化の実相は年層･男女を問わず［ŋ］である。一方，非鼻音化のそれは［g］である。時に摩擦が強く出て［ɣ］にもなるが，そこに弁別的な意味は見出しがたい。

【文献】

今石元久ほか（1984）『日本語方言音声のスペクトル分析資料』文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集

今石元久（1997）『日本語音声の実験的研究』和泉書店

大橋純一（1998）「子音の有声化と鼻音化」文部省科学研究費補助金基盤研究（8）研究成果報告書『宮城県中新田町方言の研究』

大橋純一（2000）「ガ行鼻音」『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』おうふう

大橋純一（2003）「音韻」『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

大橋純一（2004a）「福島県相馬市方言における語中ガ行入り渡り鼻音」『国語学研究』第 43 集

大橋純一（2004b）「新潟県阿賀北地域における語中・尾ガ行音」『社会言語科学』第７巻第１号

大橋純一（2005）「総論」『日本のことばシリーズ 17　新潟県のことば』明治書院

大橋純一（2007）「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」『国語論究 第 13 集 昭和前期日本語の問題点』明治書院

大橋純一（2011）「音韻」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

大橋純一（2012）「音韻」『宮城県・岩手県三陸地方域方言の研究』東北大学国語学研究室

加藤正信（1983）「東京における年齢別音声調査」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』文部省科学研究費報告書

金田一春彦（1967）「ガ行鼻音論」『日本語音韻の研究』東京堂出版

永田高志 (1987)「東京におけるガ行鼻音の消失」『言語生活』430

馬瀬良雄ほか（1999）「現代日本語におけるガ行鼻音の実態と共通語としての地位」『日本方言研究会 第 69 回 研究発表会発表原稿集』